

再発見！川付替えの大工事で埋めたもの

生駒親正が城を中心にまちを創るにあたり、成否の要となる土木工事が香東川の付け替えです。河口の砂州の真上に築城するのでから川の迂回はマストなうえ、簡易なやり方では水攻めに晒されるリスクもあります。その指揮を任せられたのが西嶋八兵衛です。

西嶋八兵衛は藤堂家（近江出身で武田、浅井、豊臣、徳川と主君を替えながら生延び続けた石垣造りに定評のある戦国大名家）に仕えた土木技術家です。藤堂高虎の命により1611年にはまだ20歳で大阪城の修築にも携わっています。彼は高松藩の生駒家の後ろ盾であった藤堂家から、1624年に生駒高俊（藤堂高虎の孫）に招かれ高松に都度4回足掛け19年に渡り赴任して来ます。彼は、高松の為に慢性的な水不足と高松城築城の際の治水土木という難題を、川の付け替えやため池の造成により大きく貢献しました。後に起きる生駒騒動による生駒藩の改易前に讃岐を去っていますが、その後は、津市の藤堂家下屋敷で妻子とともに暮らした後も、江戸、伊賀、伊勢と藤堂家に付き従っていることから、生駒氏を内部から支援しながらも、最後まで藤堂家に忠義を持った客人技師という立場だったと思われます。

現在、高松駅から栗林公園を通り空港へと続く中央通りは高松のまちの背骨ですが、峰山（紫雲山）で東西に二股に分かれて流れていた香東川の東側の流れがかつて通っており、高松城はその瀬戸内海への注ぎ口の砂洲の真上になります。この川は、度々干上がり水不足を起こすクセに、堆積した土砂で水深が浅く雨が降れば洪水を繰り返すという城を造るのに一番の難題でした。そこで川を西側（現在の位置）一方向に付け替え、元の河床が干上がった場所に城とまちを築くこととしたのです。その大工事を担ったのが先の西嶋八兵衛になります。川の付替え工事完成の際、

元の分岐点に願い込めて埋めたのが大兎譚（だいうぼ）と刻まれた石です。ただ、松平氏に代わる前の生駒氏の時代の出来事だけに文書など何もなく、どこに埋められたのかも分からないが長らく人々の口伝のみで、真偽不明な話とされてきていました。

時は下り1912年（大正元年）、上中津という地域で川の土手が決壊した際に県の改修工事でゴロリと出てきた石が発見されたものの、表面の文字には誰も気を留めず、高松をまちに発展させた最初の一步となる大事な石なのに、以降もそのあたりに野積みされ埋もれていたそうです。後に地元の2人の若者が何かは分からないけれど字が刻んである石に気が付き、恐らく誰かの墓であろうからと近くの安原街道脇の薬師如来の傍に移動し、更にその後も放置されてしまいました。1945年（昭和20年）夏の高松大空襲で一宮界隈に疎開して越して来っていた四番町小学校の元校長平田三郎氏が、秋の散歩中に川部橋近くの草むらに埋もれたその石に気が付き、刻まれた3文字を見てこの辺りにこんな意味深い字を残すのは博学だった西嶋八兵衛に違いないと思ひ付きました。念のために西嶋八兵衛の亡くなった伊賀上野の市長あてに写真と手紙をしたため、戦後になり専門家の筆跡鑑定をもとに西嶋八兵衛の筆跡であることが平田氏の死後に判明し、高松の郷土史の大発見となったのです。今では栗林公園の商工奨励館の中庭に移されています。それでも気が付く人が稀なほど地味な石ではあるので、実物を見ると平田氏の再発見にあらためて驚きます。

大兎譚とは4千年前に中国の黄河を治め治水の神と讃えられた「兎王の事業」という意味で「書経」中の一編の表題から来ています。治水工事の際にはその王の偉業にあやかり竣工式の際に大兎譚と刻んだ石を埋める風習があり全国130以上で見つかります。高松では、これにちなんだお饅頭もあるのでご賞味あれ。（柘植敏秀）（参考文献：北原峰樹著、平田三郎の生涯）

● 高松城の復元活動にご賛同頂いている法人会員

- （公財）松平公益会、（宗）石清尾八幡神社、高松市婦人団体連絡協議会、高松市茶華道協会、高松市大工町自治会、玉藻公園(指定管理者：香川県造園事業協同組合)、高松丸亀町商店街振興組合、高松市観光ボランティアガイド協会、
- （公）高松青年会議所、(株)香川経済レポート社、香川証券(株)、(株)喜代美山荘、ネッツトヨタ高松(株)、(株)二蝶、(株)アムロン、
- (株)菅組、高松帝酸(株)、(株)香西工務店、高松商運(株)、久米加(株)、(株)森造園、(株)ネクサス、高尾石材(株)、四国興業(株)、(有)魚夏、大塚整形外科医院、(有)富岡建築研究所、(株)安藤・間四国支店、後藤設備工業(株)、(株)西部広告社、三条山下内科医院、小手毬、(株)オーディオサミット、(有)角田米穀店、(株)西崎組、(株)EBiSU、日本舞踊藤間流「勘雅智枝会」、(株)朝日段ボール、(株)HERMIT、(有)折鶴（居酒屋 波右衛門）、ハウス美装工業(株)、(株)フェアリーテイル、大樹生命保険(株)高松支社、(株)ツゲ炭酸工業、藤本秀久邦社中（順不同）
- 【協賛団体】高松商工会議所、高松観光コンベンションビューロー、高松玉藻ライオンズクラブ、香川経済同友会（順不同）

特定非営利活動法人 高松城の復元を進める市民の会

（事務局）〒760-0029 高松市丸亀町13番地2（高松丸亀町商店街振興組合内）

TEL：087-823-0001 FAX：087-823-0730

<http://www.takamatsujyo.jp/>

新規会員募集 【年会費】個人2,000円（一口） 法人10,000円（一口）

申し込みはHPのトップページ上部右横の「入会申し込み・お問い合わせ」のバナーから



特定非営利活動法人 高松城の復元を進める市民の会

第8号

高松城復元かわら版

令和2年1月発行

● 復元的整備へ基準緩和

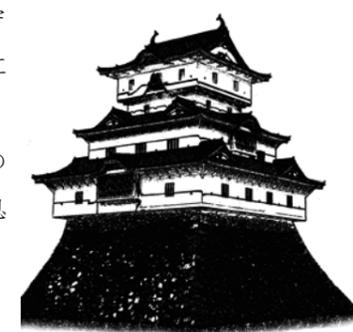
去る9月議会の代表質問で大西市長は、8月に文化庁の有識者会議が歴史的建造物の再現の基準緩和方針を打ち出したことを受け、高松城も外観は忠実に再現しながらも内部は一部意匠構造を変更する「復元的整備」で再検討し実現を目指す、と答弁しました。

これは全国にある城が構造上次々と建て替えの時期を迎えつつあるうえに、地方再生の切り札として、現在喪失していても地域の資源は活かそうという国の流れを受け、文化庁が史実絶対重視から、地方活性化という経済的側面を考慮する方向への大転換を図ったことになります。そのきっかけとなったのが、平成30年8月に高松市と当会古川理事長はじめ市議会議員の先生方が文化庁に赴き、10万人の署名を背景に復元の基準の緩和を強く要望したことがあると言われております。まさに、当会が中心となり関係諸団体や議会とも歩調をそろえ天守復元への道を切り拓いたのです。

現在、松前城、名古屋城、高松城の3天守がこの規

制緩和の対象となる俎上に上がっていると言われており、図面等資料の多い名古屋城が、一步抜きん出た感はありますが、建材の質にこだわらなければ高松城は約40数億円で木造復元が可能との試算もあり、俄然復元へのリーチ状態に直面してまいりました。

被災した熊本城も着々と復元が進んでいる中で、次はこれらの天守と目されており、復元的整備の内容を高松市が早急に取りまとめて文化庁へ提出、そこから国の中で審議されると思われますので、着手までにあと3年～5年で天守復元の工事が始まるのが期待されます。このペースならば10年程度で高松城天守の優雅な姿をこの目で直に見ることが叶うでしょう。天守復元の大願成就の日まで、あともう一息です！（事務局）



● 古川理事長 新年ご挨拶

～当会の大きなミッション到達への御礼～

新年のご挨拶を申し上げます。日頃当会の活動に会員皆様をはじめ多くの方々のご協力を賜り厚く御礼を申し上げます。

さて、永きに渡った天守復元へのムーブメントは、過去に多くの先達が目指しながら長年前に進まない膠着状態でありました。しかし今般、その幾多の無念の想いを糧に、復元への基準緩和という国の大きな方針転換を引き出すことに成功し、対象有力候補として高松城が3つのうちのひとつとして挙げられることになりました。

この大きな転換点を導き出したのは、地元関係団体の協力のほか高松城の入口などで展開したわれわれ会員一人ひとりの地道な署名活動によるところが大きいことは、自画自賛にはなりますが誉れに値すると思います。

今後、復元の道は明らかにフェーズが変わり、市が方針転換に即した「保存活用計画」を文化庁へ提出さえすれば、具体的な検討段階へと進むこととなります。

当会はボランティア団体（後にNPO法人化）としての発足以来掲げてきた大きなミッションをほぼ達成することとなります。諸般の事情もあり、次年度にはNPOを解散し任意団体に戻ることを模索しています。たとえ法人格はなくなったとしても、サポートの青空に市民の誇る天守が再びそびえ立つのをこの目で見届げるまでは、お城に対する様々な活動や市への協力は今後も続ける所存であります。会員の皆様におかれましては、本年も引き続きご理解ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。新年のご挨拶とさせていただきます。

（理事長 古川康造）

● 和歌山城 視察研修



雲ひとつない秋晴れの9月26日、会員19名で和歌山城を訪れました。入会して間もない私ですが、南海フェリーで海から、というプランにワクワクして参加しました。

さすが南海の要、暴れん坊将軍もいたという紀州のお殿様のお城は素敵でした。日本で3つしかない連立式天守や青石の道、関ヶ原の戦い以前に造られ

た「野面積み」や浅野幸長の時代の「打ち込み接ぎ」、そして徳川時代の「切り込み接ぎ」の石積みが手に取るようにわかる多彩な石垣、西の丸庭園、御橋廊下等々ボランティアガイドの内海さんがていねいに説明してくださいました。昭和33年に再建された三層の大天守閣を見上げたとき、南蛮造りといわれる我が高松城の天守が復元された時には、と思いを馳せました。

面白かったのは「御橋廊下」で、二の丸御殿と西の丸庭園の間に斜めにかかった、屋根と壁付きのお殿様専用の橋です。床は小刻みに板を敷き詰めた階段状になっていて、裸足で渡ると大変痛かったのですが、これはお殿様が草履で歩く際に滑らないようにという配慮からだそうです。本当に楽しい一日でした。ありがとうございました。(乃田文子)



● 秋の講演会 「高松藩が造った三つの世界」

講師：松平公益会 理事長 佐伯 勉氏
私が育った街、高松には、現在、いわゆる天守閣が存在しない。少なくとも、ごくごく最近まで、それが私にとっての当たり前でした。ところが、近年「高松城の復元を進める市民の会」と、FaceBookにてご縁をいただき、これまでもいろいろとイベントにも参加してきました。それを通して、お城のある街は、洋の東西を問わず、それぞれの街の特色を生かしつつ魅力的なものになっていることをよく意識するようになりました。しかし、だからと言って、「高松城の復元を進める」ことが様々な点においてそれほど簡単ではなかったことは想像に難くないはず。そんな「高松城の復元を進める市民の会」が、主催した今回の講演会のテーマは、「高松藩が作った三つの世界・この世、あの世、幻の世」。これって、いったい何のこと？と、おそらく大多数の方々思うはず(笑)。しかしながら、話しを伺うと、高松藩の防衛機能を踏まえた都市設計が、



当時の宗教観を踏まえつつ、さらにはほぼ一直線上に配置されているあたり、大変興味深い事実でありました。いま、私たちは、街のありようにそこまで関心があるとは言えませんが、お城を通して、郷土の文化や思想の変遷に触れ、その積分したものがマクロに日本の歴史を形作っているとは言えないでしょうか？だとすれば、身近に起きている事象についても、なんとなくまんざらではないと思えて来るではありませんか？新たにできる(だろう)高松城についても、こういう意識が芽生えれば、もっと市民に慕われてくると確信しております。

(半田 哲也)

● ふわふわ高松城仏生山でお披露目

11月19日、仏生山で行われた恒例の「高松秋のまつり・仏生山大名行列」にて、当会の企業法人会員である市内イベント企画・運営会社の株式会社ネクサスが、高松城天守をイメージした遊具「ふわふわ高松城」を製作し、お披露目されました。

これは空気で膨らませた大型遊具で、高さ約5.5メートルもある立派なもので、高松城天守の特徴である3重4階で南蛮造りという外観の特徴を表現されています。内部で子どもたちが安全に遊べるようにフワフワの構造で、今後各種のイベントなどで使用される予定です。子供たちが小さな頃から、高松の誇りであるこの天守を知り、直に触れて親しみを持ってもらえるツールとなることでしょう。

仏生山には、松平氏の菩提寺である法然寺があり、このお祭りの醍醐味である大名行列とともに、この遊具は早速歴史を感じさせる一役に貢献していました。(事務局)



● 昨年の活動実績

- 1月17日(木) かわら版第7号発送
- 3月16日(土) 理事・運営委員会(ボランティア交流室)
- 4月2日(火) 高松城天守閣模型の贈呈式
- 4月20日(土) 理事会(丸亀町)
- 5月25日(土) 総会(レクザムホール)
東ノ丸石垣遺構見学
- 8月13日(火) 高松まつり花火ビア(花樹海)
- 8月17日(土) 高松城映画上映会(桜の馬場)
- 9月20日(金) 理事・運営委員会(丸亀町)
- 9月26日(木) 和歌山城視察研修
- 11月9日(土) 秋の講演会(レクザムホール玉藻)
- 12月27日(金) 理事・運営委員会(丸亀町)



(左奥-長谷川進氏
玉藻公園披雲閣)

● 天守復元にエレベーターはある？ いない？

昨年大阪で開催された主要20カ国・地域首脳会議(G20)で、安倍総理の大阪城天守について次のようにウイットを利かした挨拶が、一部メディアで賛否を巻き起こしました。「この天守閣は約90年前に復元されました。その際にひとつだけ大きなミスをしてしまいました。エレベーターまでつけてしまったのです。(要約)大阪城は復元？ひとつだけ？と突っ込みたところですがウイットに目くらまをされても野暮です。しかし、この発言を一部メディアや障害者団体は、バリアフリー意識の欠如だと問題視したのです。

かつての大阪城のようにコンクリートで再建されたいくつかの城を、歴史を歪曲しかねないと国(文化庁)は強く懸念し、その後は限りなく忠実な復元しか認めないとし、史跡のお城は木造による復元しかできなくなりました。当然エレベーター(以降EVと称す)や来館者用トイレなどはなく、健常者でも手すりなしでは昇るのに窮する急勾配な階段しか再現できなくなりました。元々は戦国の籠城戦を考へて造られたのが城ですから使いにくいのは当然です。

では私たちが復元を目指す際に、どこまでユニバーサルデザインを考慮せねばならないのでしょうか？名古屋ではEVがない復元は社会的弱者軽視だとして障害者系団体が1万人の署名活動を始めたかっています。富士山に登るのに車椅子で

登れないからロープウェイを付けるか剛力さん代を補助しろとか、JR九州の赤字路線で駅を無人化するの障害者切り捨てだと訴訟を起こすとか、似たような話はこと欠かない時代です。弱者の権利は主張する側に大義があるだけに、意見を挟むだけで気を遣うところではありません。フィルツェの礼拝堂ドゥオモには小さいけれどEVが1基あったり、中国の万里の長城には北京五輪で10カ所でEVや昇降スロープが作られたりしてはいますが、多くの世界遺産にEVなどがあることは極めて稀です。妥協点として、名古屋ではパワーアシストスーツを貸し出すとか、ボランティアの介助人を検討するという案が提示されているようですが、そのあたりが歩み寄りの最大値と思えます。

高松城の天守ではどうされますか？文化庁が認めそうもないEVを計画に盛り込みますか？天守をレセプションでも使えるよう内部にトイレや水回りは要りますか？今までは漠然とした外観イメージでまともでしたが、具体的な検討となると意見が分かれるところでしょう。恐らく市民の意見は更に細かく分かれると思われます。まずは史実優先が前提なので、落とすところは名古屋と似たようにしかならないとしても、議論のプロセスは省略すべきではありません。夏目漱石の草枕の通り、「知に働けば角が立つ、意地を通せば窮屈だ、とかく人の世は住みにくい。」(柘植敏秀)